

オオクチバス規制へ

外来生物法 指定第1陣 環境省、方針一転

国内生態系に影響を及ぼす「特定外来生物」の指定作業で焦点になっていたブラックバスの一種オオクチバスについて、環境省は21日、指定に関する議論を半年間先送りする方針を転換し、6月の外来生物法施行時から適用される、指定第1陣のリストに盛り込むことを決めた。小池環境相が先送りを認めない考えを表明し、担当部に再検討を促したことで事態が急転した。31日に開かれる哺乳類なども合わせた指定の全体会で、決定する見通し。

Ⅱ3面に関係記事

21日午後の指定に関する魚類専門家会合で、小野寺浩・同省自然環境局長は「環境相から『まず省がとりまとめ、19日の

オオクチバスの専門家グループ会合で了承された「半年をめどに指定に向けた検討を進める」とす

る報告案を、白紙に戻す考えを明らかにした。指定されると、釣り自体が禁止されるわけでは

ないが、適切な管理のため輸入、移動、飼育、放流などが規制される。魚類専門家会合では、4人の委員が「生態系への被害は明らかで、一刻も早く指定すべきだ」「釣り人が法律を周知する期間として、(法施行までの)半年は妥当な線だ」などと発言。ブラックバスの別種、コクチバスやブルーギルなど3種を候補とする魚類の特定外来生物リストを決めた。オオクチバスについてはこのリストに入れ



オオクチバス＝環境省提供

が強くあつた」との付帯意見を31日の全体会合に報告し、判断を仰ぐことになった。

小池環境相は21日の閣議後の記者会見で、「外

来生物法の一番の目玉がオオクチバス。指定回避は先送りと批判されても仕方がない」と表明、担当部局に再検討を促した。

小野寺局長は「釣り人

の協力は重要なので粘り強く理解を求めていくしかない」としている。これに対し、指定反対の中心になってきた釣り業界関係者らの団体「日本釣

振興会」は、「オオクチバス会合で合意された結論を大臣一人の考えで覆すならゆゆしき事態。事実なら嚴重に抗議する」とのコメントを発表した。

オオクチバス 規制へ一転

環境相、妥協せず

省内は「寝耳に水」

「指定回避は批判されても仕方がない」――。ブラックバス的一种オオクチバスが、対応の先送り方針から一転して、規制対象の特定外来生物に第1陣で指定されることになった。指定派、反対派の双方に配慮した事務方の妥協案を、「生態系保全」を重視する小池環境相が拒否し、政治のリーダーシップを発揮。わずか2日での大幅な方針転換となった。

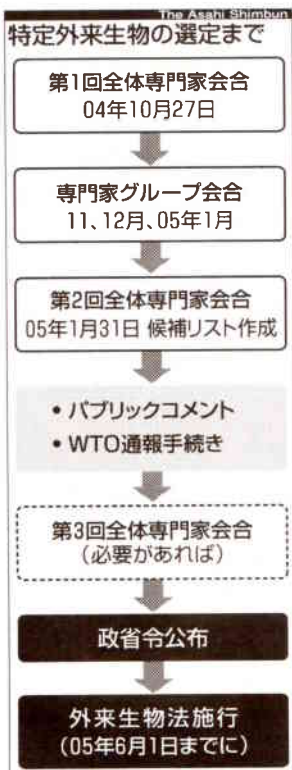
(秋山惣一郎、古澤範英) 11面参照

「まず指定したうえで防除を進めるのが、生態系を守るという外来生物

法の趣旨に沿っており、正しいのではないか」
21日午前、閣議後の記者会見で、小池環境相は、指定の議論を半年間延長するオオクチバス専門家グループ会合の報告案に不快感を示し、6月の同法施行と同時の第1陣で指定することに、

改めて強い意欲を示した。
発言に、担当の自然環境局内は大騒ぎになり、同局幹部は大臣発言の真意を確かめようと走り回った。環境相は、報告案をいったんは了承したものの、「生態系への影響を認めながら、釣り業界

などへの配慮で指定を先送りするのはおかしい」との批判を受け、思い直したようだ。



専門家会合のメンバーにとっても、この日の方針転換は寝耳に水。指定に反対してきた全日本釣り団体協議会の来田仁成専務理事は「大変心外。いきなり指定したのではかえって密放流などが横行する懸念があるので、現実的に管理する方策や対応を提言してきた。釣り人の自浄作用を働かせる唯一のチャンスだったのに」と憤る。

環境省が、法成立後の昨夏から指定派、反対派と話し合いを続け、歩み寄りを促してきたのは、そうした懸念も一因だった。だが、小池環境相は「釣りの作法のことまで環境を預かる者が言うべきではない」との立場だ。

早急な指定を求めている全国内水面漁業協同組合連合会の橋本啓芳専務理事は、「ほっとした。漁業者の喜ぶ顔が目につかぶ。ただ、駆除はこれからで、元に戻すのは大変だ」と話す。WWFジ

ヤパン、日本野鳥の会、日本自然保護協会の自然保護3団体も同日、「日本の自然環境を守る最高責任者としての英断で、小池環境相を強く支持する」などとする緊急声明を発表した。

政界でも、指定を求める内水面漁業振興議員連盟（会長・桜井新参院議員）と反対する釣魚議員連盟（会長・綿貫民輔衆院議員）の双方が、運動を繰り広げてきた。自民党内水面小委員会が、04年にまとめたオオクバスの取り扱いについての

結論は、「いたずらに駆除を行うべきではなく、有効利用を図るべきだ」などと両論併記となっていた。

同省は同法成立と引き換えに、指定リストを決める際に自民党の了承を得ることを約束。与党内でも賛否がある中で、指定を急ぎすぎればつづれる可能性もあり、議論の先送りは、そうした点も考慮した結果だった。環境相は「政治的な判断については我々がする」とも述べ、与党内の説得に自信をみせる。